

教職大学院 Newsletter

No. 51

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.04.06

教職大学院の活動に期待する

福井大学長 眞弓 光文

子ども達の教育について考えた時、特に初等・中等教育では、一人ひとりの子どもの個性を大切にしつつ、その子の力をできるだけ伸ばす教育が求められることは言を俟たないと思います。資源に乏しいわが国では、特に少子高齢化が進行している現在では、このような教育の重要性はさらに高くなっていますが、その実現は、その社会が内包する教育力、ここには社会の教育に対する理解や支援のみならず教師という職業に対する尊敬の念なども含まれると思いますが、および教員の優れた教師力の両者が相俟ってこそ、可能になるものだと思います。

ところが、教師という職業に対する社会の意識はこの半世紀で大きく変貌しました。教師という職業に対する尊敬の念が低下し、同時に、教育に対する理解や支援も低下したように思われます。その代表的な例が、子どもに対する親としての責任を放棄して学校（＝教員）にすべてを押しつける一方で、不当に教員を批判し、そのひととなりまで平気で攻撃する、いわゆるモンスターペアレントの増加です。このような親は特別であるとしても、教育や教員に対するマスメディアの無責任とも言える批判的な論調に代表されるように、社会全体で見ても、教育に対する理解や信頼を醸成していこうという動きは弱く、残念ながら教師という職業に対する社会の尊敬の念が回復しつつあるようには感じられません。また、学校における「荒れる子ども達」や「いじめ」の深刻化、心の発達に障がいを持つ児の増加、さらに多くの子ども達がいわゆる「打たれ弱く」なっているなど、教育を取り巻く問題も増加し、多様化しています。このような状況下で、一人ひとりの子どもの個性を大切に、その児の持つ力をできるだけ伸ばす教育を実施することは決して容易ではありませんが、成し遂げなければならないことだと考えます。教員はより一層教師力を磨き、「教師が信頼できないので学校を応援できない」という負の連鎖ではなく、「教師が信頼できるから学校を応援し

よう」という正の連鎖を生み出し、社会の学校教育に対する信頼を向上させて社会の教育力を高めるよう、務めなければならないと思います。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（以下、教職大学院）はその発足以来、特徴ある先進的教師教育を実施してきました。特に、地域の学校を拠点校とし、そこで1年間に及ぶ長期実習を行い、実際の教育現場で大学院生の教員としての資質向上を図ると共に、その学校の他の教員にも大学院教育の効果を波及させるという本学教職大学院の教育方法は、「福井方式」として全国レベルで高く評価されています。福井大学教職大学院はこれまでから、優れた教師力を持つ教員を福井のみならず全国各地で養成出来るようにするために、全国の教職大学院等と連携して「福井方式」による教師教育を広める活動を実施してきましたが、この全国展開の取り組みは今後益々重要になってくると思います。その理由の一つとして、これから当分の間、全国で多くの教員が定年を迎えて退職することが挙げられます。大勢のベテラン教員が退職しても学校現場が混乱することの無いよう、優れた教師力を持った教員が新たに養成されて、退職していく教員とのスムーズな入れ替わりがなされなければなりません。また、少子化が進行して生徒数が減少すれば、規模の縮小により教員数が減少する学校が増える可能性があり、その様な学校では一人の教員に色々な役割を果たすことが期待されると思われます。さらに、少子化により子どもの数が減れば減るほど、社会の教育に

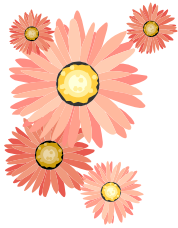
内容

- 教職大学院の活動に期待する (1)
- スタッフ退任のご挨拶 (2)
- 兼任終了のご挨拶 (5)
- ラウンドテーブル特集 (10)
- 上海師範大学・訪問視察を終えて (16)

対する期待は増し、その反映として、教育に対する社会の目がさらに厳しくなることも予想されます。当然、教員一人ひとりの教師力がこれまで以上に求められると考えられます。さらに、障がいを持つ児を含め、多彩な児を同じ教育の場に受け入れる、インクルーシブ教育の実施が今年度からこれまで以上に推進されれば、個々の教員はこれまでとは違った新たな教師力を身につけることも必要になると思われます。

教師という仕事は、時に厳しい要求にもさらされ、つらいこともあるでしょうが、子ども達の持つ力を引き出し、伸ばすことにより、無限の可能性につなげるというという、本当に楽しい、やりがいのある仕事で

す。是非、教育に対する志と意欲を持つ若人が教師になって、子ども達の教育に尽力していただきたいと願っています。福井大学は、そのミッションのひとつとして、教員養成における「福井方式」を全国展開することを掲げています。福井大学教職大学院が、他大学の教員養成系学部や教育委員会等の県の関連組織とこれまで以上に連携を強めて、その優れた教師教育機能をさらに発展させ、日本の教師教育の新たな地平を開き、将来を担う子ども達をきちんと教育することのできる優れた教師力を持った教員を養成して、社会に貢献されることを期待しています。



スタッフ退任のご挨拶

福井大学教職大学院 津田 由起枝

3年間はまさに天が私にくれた最高の学びの年月だった。ここに来る前、ある方から「校長という肩書きを一度取っ払って、本来の教育の在り方にとっぷり身を置くことができる絶好の場ですね。」と言われたことを思い出す。3年前はそのことをじっくり考える余裕がなく聞き流していたが、去りゆこうとしている今、それを実感している。それにしても、このたった3年間の間に、平成23年3月11日の東日本大震災、政権が2度も変わるという出来事まで起きた。教育の動きもそれに翻弄されているといってもよい。

しかし、ある人はそれでもなお、「教育は不易だ」という。元来が保守的で狭い視野の中で生きてきた私も、実は長い間そう思っていた。世の中がどう変わろうと、子どもを育てるという一点では決して揺るがない教員としての信念のようなものだった。そんな私が、少し前のその思いから今は若干変化しつつある。確かに先生や生徒という外枠は変わらないものの、人と人との関わり方や目指すもの、存在意義などは、好むと好まざるに関わらず大きく変化させられてきていると思わざるを得ないからだ。こんな当たり前のことに気づかせてくれて、今後の教育の可能性まで見せてくれた教職大学院、こんな素晴らしい環境に3年間というまとまった期間身を置けたことは、教員人生の残り少ない私にとって願ってもない大きな財産となった。

私は、福井大学教職大学院に勤務した3年間の中で100名を超える院生や数百人のも及ぶラウンドテーブルで一緒に過ごした方々、更新講習で語り合った先生方に出会い、互いに実践を語り合ったり、聴き合ったり、ファシリテーターの役割もさせていただいたりし

てきた。全ての方々が教師や専門職としての夢や誇りに満ちあふれていると同時に、それ故の躓きや悩み、苦悩に押しつぶされそうになっている現実があることも数多く聞かせていただくことができた。しかし、厳しい現実の中でも何とか明日の教育を切り開こうとする先生方にもたくさん出会い、ファシリテーターである私が何度も励まされてきた。

教師という仕事は生身の人間相手、それも未完成の人が相手の職業である。大人と違ってこちらの思うようにいくことは稀である。いうならば、うまくいかなくて当然なのである。それならば、逆にうまくいかない現実から見えることは何なのか、同僚の教師はそれをどう乗り越えているのか、子どもの視点で見るとどうなのかといった発想の転換を図ることで、新たな教師の力量を形成していくことができるのではないかと。うまくいった結果を披露し合うことより、うまくいかない日々の状況をともし出し合いながら考え合おうというスタンスの方がより現実的であり、悩める教師の心に寄り添うことになるのではないだろうか。一人の先生の苦しみを多くの先生の苦しみとして分かち合い、学び合うスタイルの重要性を数多く学ばせていただいた。これは、とりもなおさず、子どもたちの学びの形でもある。

さて、私は今、どこかの学校に羽ばたこうとしている。おそらく、この3年間で経験した実践的な学びのコミュニティづくりにおいて、現実との狭間で少なからず悩み多き日々を送ることになるであろう。異質な存在を認め合い、協働で困難を乗り越えようという学校風土づくりを目指して、新たな挑戦が始まる。この3年間ともに歩んでくださった教職大学院のスタッフ

の先生方から学んだ理論や多くのスクールリーダーの方々が残してくれた長期実践研究報告書などを支えに、今度は私が学校づくりの歩みを創っていく番だ。その学校の子どもたちや先生たち、その他多くの関

わってくださる人たちとともに、ゆっくりと焦らずに、自分らしく歩んでみたいと思っている。様々の皆様にお世話になったこと、心より感謝申し上げたい。

福井大学教職大学院 川上 純朗

今年の冬は例年より平均気温が1℃低かったという新聞報道があった2013年。それでも昨年度より1日遅れでカタクリが芽生えた。大好きな春が来た。しかし今年は心の居所がいつもと違う。3年という期間限定で福井大学教職大学院に異動し、その期限が切れる春だからだ。文化の違いに強烈な違和感を感じつつスタートした3年前と今の自分は何が違うのだろうか。それは成長なのか。成長なら何が成長したのか。

(1) 個人と組織の捉え直し

学校とはいえ、研究者が構成メンバーの大学。そこには、思考基盤の違いとその違いに根ざした組織が存在した。業務実績は個人であり成果の優劣は個人が背負う世界。組織名で業務に当たってきた組織最優先人とは、重きを置く視点も業務遂行のプロセスも異なる。個人と組織との関係を改めて問い直す貴重な発見だった。

(2) 教育理論とは

他学部出身の自分の教育実践には、常に負い目を感じていた。自分には教育理論が足りない。(だからうまくいかない)教育学部には、自分の弱みを埋める理論知が必ずある。そう期待して乗り込んだ教育学部。しかしここで学んだ「理論」は、教育実践の中に理論があるという「理論」だった。教育理論は実践知・経験知を意識的に活用することで形成される。それは論文というバーチャルなペーパーの中には、現在の複雑な教育問題を解決する魔法の教育理論など存在しないということでもある。過去の知識を総動員してまず実践すること、そこで得た実践知を次の実践に組み込んでさらに実践する。この繰り返しの中で見つけ出された成功の法則こそが教育理論。30年教育実践を行ってきたが、教員の成長過程そのものが教育理論を生み出す過程でもあることに初めて気付いた。

(3) 本質を見抜く異質な他者から視点

県内他地区、県外そして海外の教育実践者との交流。異質な他者の視点から見えるものは自己の教育実践の立体的な位置づけである。実践者は、実は自らの実践の位置付けが見えていない。それは、個人の価値付けによる判断に頼っているためである。そこに座標軸を与えてくれるのが異質な他者の視点。他県の教育実践者との交流で見えてきた福井県の強み、弱み。フィンランドでの教育実践者との交流では、今まで絶対的な価値だと信じ切っていた仲間づくり、集団づくりの教育にも功罪があることを知った。時代の変化を捉え、制度や教育内容を圧倒的なスピードで改革していく中国の教育状況を知ったとき、民主的な手続の手堅さと凡庸さが見えてきた。

思いつくまま、大学に来たからこそその知見を綴ってみた。これが教員としての成長なのかどうかは分からない。逆に教育現場を離れたことによるマイナス点もあるに違いない。トータルしたらプラスだったかマイナスだったか。そしてこのことにより自分が何ができるようになったのか(あるいはできなくなったのか)今の時点では全く見えない。

教育も教員の成長も何らかの測定器具をあてれば、数値として測定できるものではないのかも知れない。しかし間違いなく、これまで30年間過ごした教育現場とは異質のエキサイティングな3年間だった。これからの自分に期待したい。このような貴重な経験の場を頂いた大学関係者、教育委員会関係者に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



福井大学大学院学校教育専攻 八田 幸恵

このたび、2013年3月をもって福井大学を退任することになりました。着任したのは5年前、2008年4月のことです。学部の教員として着任したのですが、協働研究員という立場で、教職大学院にも関わらせていただけてきました。

2008年度、私にとっての福井大学初年度は、激動の年度だったことを記憶しています。大学教員1年目で右も左もわからないまま、学部の教員養成カリキュラム改革の目玉である教育実践研究(いわゆる金2)の開始、教員免許更新講習の試行実施、教職大学院の立ち上げ、学部教育学教員の教職大学院移籍に伴う

諸々の仕事の引き継ぎ、探求ネットワークなどなど・・・毎日が怒涛のように過ぎていきました。2年目以降は落ち着いたかと言えばそういうわけでもなく、この5年間、あっという間に過ぎてしまいました。

慌ただしく過ごしてしまい、5年の間に学部教育のために一体何ができたのだろうかと振り返ってみますと、大変心もとなくなります。しかし、これだけはやったと言えることは、2010年度から2011年度にかけて行った「教員養成スタンダード」の作成です。教師の能力を動かないもののように捉え、細かく分割し、ひとつひとつがあるかないかをチェックしていく従来の方法に強い違和感を覚え、それに替わるものを必死で考えました。

その際、手掛かりとなったのが、教職大学院で学んだ「省察」の概念です。ただ、「省察」という概念では私自身はどうもうまく思考できないので、ここでは私なりの言葉で「問いの再構成」と言います。「問いの再構成」とは、教師は常に自身の実践について「問い」を持ち、「問い」に基づいて実践（思考・判断）を行っている。そして、実践を振り返ることで（表現）、「問い」の答えを出そうとし、学習（理解）が生じる。しかし、「問い」が解決されることはない。なぜなら、「問い」に答える過程で視野が広がり、無数の小さな「問い」が発生し、以前に立てた「問い」自体をメタ的に「問う」ことになるからである。そし

て、広がった視野のもので以前に立てた「問い」を検討し、その「問い」を立てた時点における自身の思考のとらわれを深く認識し、「問い」を再構成する。

「問い」が再構成されることによって、「問い」と答えのサイクルは階層を上げていき、理解は底なしに深まっていく。この探究と学習の運動状態にこそ、教師の力量の根幹を見るべきではないか。この運動状態こそ、評価すべきではないか。そのように考えました。

このように書くと、少し語弊があります。上のよう

に考えられるようになったのは、最近だからです。「教員養成スタンダード」を作成している最中は、ひらめきながら走っている状態で、このような整理はできませんでした。作成しながら、教職大学院で学んだ「省察」の意味内容を確認し、また同時に自分自身で教師の思考に関する研究を進めていき、言語化できる状態になりました。私自身が、「問いの再構成」を挟み込んだ探究と学習を経験したのだと思います。

5年間、本当にありがとうございました。少し遠くなってしまいますが、今後も、「自律した思考主体を育てる」という巨大プロジェクトのプロジェクトメンバーとして、共に研究を進めていければと思います。最後にもう一度、本当にありがとうございました。



福井大学大学院教科教育専攻 石井 恭子

教職大学院がスタートして5年経ちました。立ち上げのときからご一緒できたことを、心から幸せに思います。それまで訪れたこともなかった福井県を、今は第二の故郷と感じています。たくさん先生のたや地域のかたとお会いし、語り合い、ともに学び合うことができたこの5年半は私の人生の宝物です。ほんとうにありがとうございました。

実務家教員という初めての枠組みで福井大学に着任したのは、開講半年前の2007年9月1日でした。教師という職業を高度専門職ととらえ、省察的实践家と呼ぶことを論文や書籍で知ってはいましたが、この教職大学院はそれを具現化する一つの形だと感じました。特に、学校拠点の長期実践研究といわれるカリキュラムの大きな柱は、勤務校でいつも通りに授業をし、担任や研究主任等をしながら大学院生として学ぶシステムです。

従来、大学院といえば、学校を離れて一人の指導教員について研究手法を学びつつ自分の方向を探っていくものでした。私自身もそうした大学院修士課程で学びました。一つの分野の研究に触れた経験は確かに今の自分の基礎となっているものの、修士課程が終わっていざ戻ってみると、複雑で流動的な学校の現実に向かう自身の実践的な判断・実行力については、また新

たに学び直さなければならない、というのが実感でした。

授業をどのようにしたら、どの子どもにとっても意味のある学びとなるのか、ということは、私たち教員の永遠の課題です。目の前の人たち、彼らがおかれている状況、社会の中で、常に考え改革し続けなくてはなりません。だからこそ、日頃夢中で実践していることを、ふと立ち止まってふりかえり、改良する視点を育て、自信を持って先へ進むために、教職大学院は学校拠点でなくてはならないのです。授業は大学院で作るのではなく、教室で教師と子どもでつくるものだから。

こうしたカリキュラムやシステムにおいて一番大切でありながら、時に見過ごされがちなのは、大学教員自身が共に学び合う姿勢と情熱を持ち、お互いに敬意と信頼を持って結びついていることです。学校での教員の同僚性を提案する大学教員自身が同僚性を構築できなかったらなんの説得力もないですね。

学校に学年会や校内研究会があるように、実は、教職大学院教員も教務や総務といった校務、研究会を日常的に行い、一つの学校のような組織で動いています。毎週行う研究会では、院生や学校の取り組みを議論したり、個々の専門研究や実践を聞き合ったりし

て、まさに教職大学院の校内研究といった感じです。30名の大学院生とその所属校の状況や課題についても、多様な教員相互で共有し知恵を出し合ってきました。

大学教員と院生との協働研究は、教え-教えられるという関係を超え、ともに学び合う関係として継続しているように感じます。歴代の修了生の多くが、年2回のラウンドテーブルに参加し、その後の生き生きとした実践を語ってくださったりファシリテーターをお引き受けくださったりして、これまでもこれからもずっと同僚としてのおつきあいが続きます。県内の学校にお伺いして、修了生の先生とお目にかかるのも楽しみでした。

始めの頃、「win-winの関係」「化学変化」と称していましたが、県内の実務家教員の先生がたの専門性発揮とそれに敬意を持つ研究者教員の学び続ける姿勢によって教職大学院は学校との信頼を築きながら発展してきました。毎月の合同カンファレンスでは、いつも、どのようなお話が聞けるか、担当のグループでの出会いと実践の交流にわくわくしていました。

理科の先生がたとも、授業研究、理科グランプリや理科支援員、社会とつなぐ授業など、たくさんご一緒させていただきました。先生がたの同僚性構築

(Professional Learning Community)と授業研究(Lesson Study)による授業改革の事例は、英語やロシア語でご紹介させていただく機会もありました。これからますます海外からも注目されることと思います。

先月のラウンドテーブルでは、その平等な空気感が福井の心地よさであるとおっしゃる他県の先生の言葉に私はまた勇気づけられました。これからは、私もラウンドテーブルに通い、ともに学び続けたいと思います。

東京に生まれ育った私にとっては、福井の自然の豊かさ、家族や地域の結びつきの強さなど、人が生きることとはどういうことか、学ぶとはどういうことか、という根本に立ち返り考えることばかりでした。修了生や教科教育の院生も交えた理科ゼミでは、理科の授業作りを議論し、それぞれの授業ビデオを見たりしました。福井には、教科書よりもずっと身近で豊かな教材、学びの素材がたくさんありました。どの授業からも多くの事を学ばせていただきました。

まだまだ足りないこと、ご一緒したいことばかりですが、これまでのお礼を申し上げるとともに、今後とも学び続ける同僚としてご指導いただきたくお願いいたします。どうぞ皆様お元気で。



兼任終了のご挨拶

福井大学教職大学院 吉村 治広

この度、3年間の兼任の任を終え、再び、本学教育地域科学部芸術・保健体育教育講座に籍を移すことになりました。まずは、この間、お世話になった全ての皆様から御礼申し上げます。

兼任以前、私は教職大学院に対して、様々な価値観がぶつかり合う実験場のようなところだろうとイメージしていたのですが、本学においては、当時から既に学校拠点方式等のシステムが確立されており、既にスムーズな運営がなされ始めていたようです。内部に入ってみると、この組織そのものが生き物のように柔らかく、新たな変化と適応を重ねていることに気づかされました。また、その流れが適度に蛇行しているから尚のこと、院生も私のような新参者のスタッフも、否応なく自らの立ち位置や価値観を問い直しながら進むこととなります。その結果、音楽科における協働的な探究学習の実質化という課題意識が膨らみ、それを学部での授業や研究内容へと反映するという個人的な学びも得られました。

思えば、拠点校・連携校での授業研究会、合同カンファレンスや夏・冬の集中講座、折々の様々な行事、半日がかりの教務会議→専攻会議→スタッフ研究会、その時々印象に残る場面がありました。成長著しいス

トレートマスターと頼もしいスクールリーダー、そして配属校の先生方、20名を超える多士済々なスタッフ、さらにはラウンドテーブルにご参加いただいた各方面の皆様、思い浮かぶのは不思議とその笑顔ばかりです。多分、人とつながるといことは、そういうことなのでしょう。もしかすると、小人数でじっくりと語り・聴くことの効果は、考える以上に深く長く続くのかもしれない。もちろん、組織としての教職大学院が全国から注目を集め、着実に進展していることは、年々増えるラウンドテーブルの参加人数からも実感できました。しかし、それ以上に、小さなつながりの輪がもう一回り大きなつながりの輪を生んでいく、そのような連鎖を目の当たりにして、そこに重要な鍵があると再認識させられたのでした。

今、それをいかに教育の現状と融合させるかということにきているように感じます。例えば、ラウンドテーブルのZoneD「教科」(昨年立ち上げたZoneで本年3月から「授業」に改称)の参加者を教科毎に偏らせる意識とは何でしょうか。教科内容を大切にすることと、教科を超えた内容を構想することは両立できないのでしょうか。困難な道を1人で歩くのは辛いですが、手を取り合って進むことができればと思っています。



ラウンドテーブル特集

学び合うことのすばらしさと可能性

zone A / 富山市立堀川小学校 教諭 石田 和義

初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。その中で、私が強く感じたことは、参加されている方々の少しでも他の実践から学ぶとする謙虚な姿勢です。他の実践に謙虚に耳を傾け、その違いやよさを聴き合い、認め合う。そして、共に悩み等を出し合い、支え合い、高まり合おうとする参加者の方々の姿にとっても感動しました。共に学び合うことのすばらしさと可能性を心から実感することができた2日間でした。

1日目、Session I では、ポスター報告をさせていただきました。「学校を変える」というテーマにかかわって、学校としての教育観や子ども観などの理念の共有化を報告させていただきました。その際、報告に参加してくださった方々と交流する機会を得ることができました。「理念を共有することは非常に大切と思うが、それをすべての教職員が理解したり、納得したりするためにはどのようにしたらよいのか」など、互いの悩みを率直に出し合うとともに、そうした問題の解決の仕方等にかかわって、真剣に考え合うことができました。私自身も、自分の考え方をもう一度みつめ、見直すことができ、とても貴重な時間を過ごさせていただくことができたように思います。

Session II では、「学校を変える」というテーマにかかわって、授業を中軸とした研究の組織化と校内研修のプロセス等を発表させていただきました。具体的には、教員一人一人による個人研究と教員同士の学び合いによる部会研究を連動させていく取組を紹介させていただきました。そうした発表に対して、多くの方々が真剣に耳を傾けてくださいました。また発表後、いくつか質問をいただく中で、私自身、「学校を変える」ための教員同士の学び合いの在り方はどうあればよいか、真剣に考えることができました。少しでも学校を変えていこうとする熱い情熱をもった方々と共に学び合うことを通して、より一層「学校を変える」ために、実践を積み重ねていこうとする思いを抱くことができたように思います。

2日目、Session IV では、少人数によるグループに分かれ、各自が持ち寄った実践記録を土台に実践の歩みを聴き合うことができました。私にとって、8時30分から14時まで時間が経つのを忘れるくらい、楽しく

かつ心に残る学び合いになりました。ファシリテーターの方を中心に、互いの見方・考え方を率直に出し合い、その違いやよさに大いに学び合うことができたように思います。その中で私自身、改めて実感させられたことは、聴き合い、学び合うことのすばらしさとともにその可能性です。学び合いの中に、他の実践記録を心から理解し、認めようと真剣に耳を傾ける参加者の方々の姿を見ることができました。そして、そうした雰囲気の中で参加した一人一人が、安心して自分の見方・考え方を出し合い、聴き合うことができていたように思います。だからこそ、Session IV の後半になると、グループ内の絆がより一層深まり、時間が経つのを忘れて、共に支え、励まし合いながら学び合うことができたように思います。それこそが、学び合うことのすばらしさであり、可能性であると改めて感じることができました。

Session IV が終わりを迎えた時、グループ内から自然と、「明日からがんばります」という声が聴かれました。私自身、この2日間の学び合いを通して、多くの方々からたくさんの指導・助言をいただくとともに、明日から再び実践していこうとするエネルギーをもらったような気がします。実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。ここで学ばせていただいたことをこれからの実践に少しでも生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。



心地よい刺激

zone A / 宇都宮市立新田小学校 教諭 塚田 真文

ラウンドテーブルでの2日間は、心地よい刺激の連続でした。帰りの移動中は心に残った言葉が頭の中を巡り、会場の雰囲気がそのままついてきているようでした。様々な方々の話を聞かせていただき、また話を聞いていただき、興奮していました。宇都宮に帰り通常の勤務をしながら少し落ち着きを取り戻した今、やっと今回の経験を振り返ることができます。

初日、Session I のポスターセッション。わたしのたどたどしい説明に興味をもって足を止めて下さった方々、また発表の後、分からない部分を率直に質問してくださった方。ありがとうございます。頷いたり首をひねったりしてくださるみなさんの姿が嬉しかったです。

Session III のテーマ別の話し合い。問いかけてくださった5つの質問。質問に答えながら、今の取り組みの課題を改めて認識することができました。また、終了後お声かけくださった方、ありがとうございます。その後何かお気づきの点などありましたら是非聞かせていただきたいです。

二日目、協働探究。発表してくださった3人の先生のお話はとても興味深いものでした。年齢や経験も異なる三者三様の実践報告でしたが、そこには「学校での学び」を見つめる真摯な姿勢が共通してありました。そして3人とも教師であると同時に自らも学び続ける方でした。約4時間30分の時間から私が得られたものは多岐にわたりました。その言葉一つ一つに喚起され、さらにつながり広がっていくイメージは、今のわたしには整理できそうにありません。どうしたものかと悩み悶々とした末に、「結局、自分は何をしたいのか」とはっとして、根本的な問いへ戻ることができました。

思えば勤務校で研究主任という分掌を受けてから、私は迷っていました。目の前の子どもたちに応じて行う指導や支援と、学校として取り組む研究の折り合いがうまくつけられていませんでした。研究にかかる時間があるのならば、担任として子どもたちのために時間を使った方が良いのではないかと、自分がやっていることは他の先生方にとってはただ迷惑なだけのこと

はないのか、そんな考えが繰り返し心の中に浮かびました。自信をもって良いと思うことに取り組めていませんでした。ラウンドテーブルに参加した今もその迷いは消えません。しかし、迷い悩んでいてもいいのではないかと、むしろ迷いながらの方がいいのかもしれない、と思えるようになりました。なぜなら、ラウンドテーブルの2日目で同じグループになった方々がそうであったように、真摯に取り組み続けること、そのことが一番大切だからです。

「一人ではなしえない成長ができる学級をめざして」これは本校のH23・24年度研究主題サブテーマです。子どもたちは学び合う場で、一人ではなしえない成長をとげます。わたしは学校のいろいろな場面ですんなり素敵な場面を見てきました。それは、子どもだけに限られたことではないのです。福井での2日間は、人は伝え合い学び合う場を通して、一人ではなしえない成長をとげることができると実感させてくれました。

ラウンドテーブルに参加する前、今回の集まりについてインターネットで検索しました。見つけたページには「実践し省察するコミュニティ」という言葉。最初はどのようなことなのかよく分かりませんでした。しかし今はそのタイトルに込められたものを感じています。

今回、たくさんの学ぶ機会をいただけたことに心から感謝しています。そして同じ時間を過ごせた方たちにも心から感謝しています。ありがとうございます。



zone B / 栃木市教育委員会学校教育課 副主幹平野 宗

今回、初めて参加させていただいた2日間で、「学び続ける教師」とは何か、市教委として今後何が必要となるのかについて深く考えることができました。

1日目のSession I・IIでは、学び続ける教員を育成し、支援するための環境づくりについて教育委員会や

大学での様々な取組について学ぶことができました。

Session IIIでは、宇都宮大学の松本敏先生、栃木市立皆川中学校の小林信彦先生と栃木市教育研究所の特色、市内の小中一貫教育研究校の8年間の取組などの実践報告をさせていただきました。参加された方々か

らの質問に答えながら、改めて指導主事として学校の先生方にかかわる私自身のスタンスや、市教育研究所のもつ「学び続ける場」としての存在価値について確認することができました。いつも当たり前のように感じていることでも、様々な立場の方々から驚きや疑問を投げかけられることで、改めて自分たちが取り組んでいることの意味を見いだせることに気づかされました。

2日目のSessionIVラウンドテーブルでは、社会教育に関わる方、教職に就きながら教職大学院で学んでいる方、大学院で学びながら地域の施設でボランティアに取り組んでいる方、私立の養護（特別支援）学校の方、上越教育大学の先生とともに語り合うことができました。

実践報告は3つありましたが、それぞれの立場で子どもたちとの関わりで悩みながら、自分なりに考えてきたことを伝えてくださいました。私にとって驚きだったことは、話し合ううちに、見えなかった糸がつながりあうかのように共通項や本質的なことが浮かび上がってくることでした。

決して難しいことを議論したわけではありません。

じっくりと報告を聞きながら、相手の悩みや疑問に寄り添い、自分の経験をもとにして話しているうちに、互いに意見が結びつき、参加者それぞれの学びになって還元されていたようでした。そして、時間がたつにつれ、初対面の6人の共感的な理解が深まっているように感じました。

私は、「この場こそが、学び続ける教師に必要なものなのだ。」と実感しました。そして、今回の経験を栃木市ならではの学び続ける教師のための「学び場」づくりに役立てたいと考えています。



zone B / 静岡県立小笠高等学校 副校長一之瀬 敦幾

私は今回初めて福井ラウンドテーブルに参加させていただいた。「実践し省察するコミュニティ」が非常に魅力的であった。ZoneB（教師）では、「学び続ける教師を育てる（人）と（組織）のパラダイム変換—学校・教育センター・大学との連携—」をきっかけ、教師の養成・研修・教職大学院での学びなどを取り上げていた。平成24年8月には、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じて教員の資質能力の総合的な向上方策について」により、教師の生涯学習、専門性、高度化について提言が出されている。本ラウンドテーブルが一貫して取り上げている「実践」と「省察」は、佐藤学「教育の方法」（2010、左右社）の中で「反省的実践家」として、不確定・不確実な学校における教師の立場を述べている。まさにこれに対応しようとする営みが福井で脈々と行われたことに他県者として敬意を表したい。また、今回はそれを実現するためのパラダイム変換をテーマとして設定され時代の最先端を走っていると感じた。

セッションの紹介と参加して考えたことなどを述べたい。

I ポスターセッション（福井大学松木健一教授）

福井大学教職大学院のやり方は、2年間学校現場を中心とする「学校拠点方式」である。それには、教師教育の2軸を①学校基盤型（先生は学校現場でのみ育成される）VS大学基盤型（教養、知識は大学で学ぶ）と②職能成長支援一体型（実践、研修を同じところで

同時に行う）VS教員養成・教員研修分離型（研修と実践の場：研修所と学校が別の場所）と捉え、「教師の学習は一体型で、場所もどこでも行う」ことを実践なさっていることがわかった。

福井県教育研究所では、近年改革を進め、教員研修に於いては、研修を校種（小、中、高校）、経験年数（初任者、5年研、10年研）を混ぜて同時に行う研修の紹介があった。従来の同世代、同校種のものと比較して、研修後の調査では高評価を得たようである。興味深かった。

II シンポジウム

コーディネーターとして福井大学の松木健一教授。発表者として、山形県教育委員会委員長の長南博先生、和歌山県教育委員会の岸田正幸先生、福井大学教職大学院准教授木村優先生で行われた。長南先生は、「子どもの能力、様子を見抜く力」（資質）が大切であり、その方法として感性を触発が必要と考えており、資質を向上させるためには、感性を触発する「四体験」を主張された。①二極対立体験：両側の体験をすることで人間の幅を広げる。人を見る目を広げる。②境目体験：生と死、男と女、危険と安全など。異なりを関知する能力をつける。③追体験：日常生活に対しての、さらに体験をさせる。④原体験：本物を見る。美しさ、恐怖、いらだちなど。リアルな具体的な物である。

岸田正章（和歌山県教育委員会）先生は、主に初任

者研修について述べられた。現場：実践力 大学：理論の結びつき、生涯学び続ける力を付けるための、初任者を初任者研修の中で大学に行かせる。木曜日の午後（研修日）に大学へ18人を16日間送った。

木村優（福井大学教職大学院准教授）は、パラダイム変換として、「学校拠点に方式」をとっている。大学・大学院拠点から学校拠点に、大学と学校を往還（協働）し教育委員会の協力を得てやっていくことが必要である。パラダイムの必要性としては、「産業社会」：事実と手続きを系統立て効率的に注入、行動を予測制御、教材作り、話、チョークから「知識社会」への転換で探究学習、子どもたちが互いに学び合う転換である。

中教審の答申でも、生徒に付ける力を、「思考力・判断力・表現力」であることから、産業社会の世代の考え方から知識社会への大きな転換が迫られている事を感じた。教育現場でこのパラダイム変換を実現できる教師に転換していくことが急務である。

III ラウンドテーブル（宇都宮大学の事例）

宇都宮大学の松本敏教授、栃木市教育委員会平野宗指導主事、栃木市立皆川中学校小林伸彦先生は、大

学、学校現場、教育行政（教育研究所）が連携した教育を行っている。今回のテーマの「実践を省察するコミュニティ」を具現化したモデルであるように感じた。教育研究所の土曜、夜研修など、希望すれば研修ができる体制と、指導主事も、大学も「学校と一緒に考えてみる。」現場の実践に参加しお互いに省察する姿に、今後の教員研修の姿を見たように感じた。

IV ラウンドテーブル（事例研究）

福井県教育研修センターの金森誠先生（福井大学教職大学院への派遣者）から、教育研究所の変革の様子をお聞きできた。金森先生は研究所全体で協働して機能する組織への変換を紹介された。また、東京学芸大学附属世田谷小学校の沼田晶弘先生からは、小学校2年生の総合的な学習としてのカレーライス作りを紹介いただいた。大きな目標を達成するためのスモールステップなど多くのすばらしい工夫が盛り込まれており、生徒の自主性を育てる大きなヒントとなった。

zone B / 上越教育大学大学院教育学研究科 准教授水落 芳明

教職大学院が生まれて5年。それぞれの大学で養成と研修の在り方を考え、様々な取組がされてきた。私は1日目のシンポジウムではZoneBに参加し、福井大学における「学校拠点校方式」と「長期インターンシップ」の発表等を拝聴した。その後のフォーラムでは、「上越教育大学流」である学校支援プロジェクトを軸とした教員養成を紹介し、全国から派遣された現職院生と学卒院生が協働しながら学ぶ講義やフィールドワーク等について説明した。シンポジウムとフォーラムに共通するテーマとしては、学び続ける教師を育てる「組織」として、そこに存在する「人」が大切であるということが挙げられる。このラウンドテーブルがそうであるように、多様な「人」が「安心して」学び合うことのできる居場所がきちんと保障されていることが「人」が「学び続ける」うえで必要なものである。その意味で居場所が明確に保障される「学校拠点校方式」は興味深い。「大学の先生方は相当大変な思いをしているのではないか？」という私の心配をよそに、「大変なんてことはありません。充実しています。」と応える先生の笑顔が印象的であった。

では、そうした取組を支える「組織」として大切にしているものは何か？

福井大学と上越教育大学に共通しているのは、「人」が顔を合わせる「場」の充実である。どちらの大学でも、毎週のように会議を設定し、議事録を蓄積し続けている。5年の取組の中で構築したシステムをルーティン

化するのではなく、常に改善し、新しい挑戦を続けるために、議題が減ることはない。「よく続いているよな！」と微笑みを交わす先生方の間にこそ「組織」が存在しているのである。

大切なことは、そうした「組織」の拠り所を「人」のキャラクターとしないことである。「人」のキャラクターが先行しすぎると「組織」の目指す方向等に対するフォーカスが甘くなる危険性がある。また、同時に「組織」が先行しすぎないことも大切である。できあがった「組織」の上に、その維持が第一命題となれば、そこに存在する「人」の柔軟な発想は生まれにくく、激動する学校現場で働く専門職としての教員を育成することは難しくなるだろう。

2日目のラウンドテーブルでも共通する話題は、「保障された居場所における多様な「人」との交流」である。拝聴した若者たちの成長過程は、それぞれに素晴らしく大変感動的であった。それぞれがそれぞれの居場所で、時には放り出されたいような課題と真摯に向き合い、成長していくのがよく伝わってきた。こうした経験を積んだ先生にこそ未来を託したい。そう感じさせる話であった。

激動する世の中でたくましく歩みを続け、学び続ける専門職としての教員を育てていくには、安心して多様な「人」と交流しながら学び合える居場所を保障することが大切なのである。そう強く感じた2日間であった。

学び合いを支える場

zone C / 昭島市教育委員会 社会教育主事嘱託職員 来住野 清子

今回、私は初めて福井ラウンドテーブルに参加させていただいた。段階的に濃密度が増していき、私の中でラウンドテーブルは「学び合いを支える場」であると改めて感じたこの2日間を、順に振り返ってみたい。

1日目【session I】は、1時間ほどのZone Cのポスターセッションで、様々な地域での取り組みを目で見て、話を伺っていくことそのものも大変面白く、併せて自分自身の実践に照らし合わせながら捉えているところもあり、ラウンドテーブルに向けて確実に頭がシフトし始め、ウォーミングアップのようだと思えた。

【session II】では、パネルディスカッション方式のシンポジウムで、私は「地域の自治と学習を支える」に参加した。全く地域も実践も異なるお二人の報告とやりとりから、特に「地域」ということについて新たな角度から捉えることができた。国分寺の公民館職員の方からの「地域のことに地域の人に関わること」に対する危惧の投げかけは、大都市と地方の違いや、地域に住んでいる人のバックグラウンド、地域に対する思いの違いを背景に据えることができ、「地域のことは地域で」ということの重みを感じた瞬間だった。

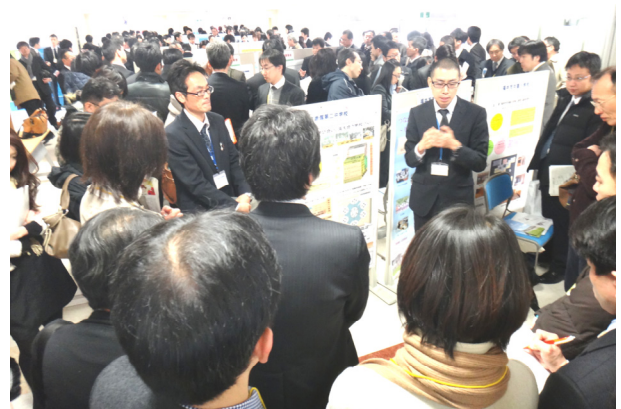
この session II では、自分が関心のあることについての実践報告を聞くことができるので、関心事に対する意識というか、情報をキャッチしようとするアンテナがさらに広がり、いい流れがつかめたように思う。

【session III】では、同じZoneでそれぞれに感じたり振り返ったりしたものを持ち寄り、小グループに分かれて報告を語り合い、聞き合った。プチ・ラウンドテーブルともいえるこのフォーラムで、私は報告をさせていただいたのだが、初めて出会った方々に手短に自分の実践の振り返りを含めて話すにあたり、専門用語ではなく、できるだけわかりやすい言葉を用いることにも意識した。言葉を丁寧に選び、まとめながら語っていく作業は、言葉を選ぶ段階で、何気なく使っている言葉が本当に誰が聞いても「わかりやすい言葉なのか」という実践の根本から振り返る作業となった。また、グループのファシリテーターの方の切り口がなかなかユニークで、もう一人の報告された方の内面の引き出しがどんどん開いていき、ご自身の実践に対する本音のところの疑問点などが語られていく様は大変面白く、ファシリテーターの真髄を見せていただけた貴重な時間だった。

1日目が終わるころには頭の中は活性化され、翌日のラウンドテーブルで、私の場合は聞き手としての態勢にうまくシフトできたように思う。つまり、この日の3つのsessionを順に重ねることが、個人の中で新しい視点やキーワードの発見や確認につながったと同時に、自身の実践の振り返りと整理をすることとなり、さらに次の段階へ向かいやすくなる仕組みが組み込まれた構成になっていたのだと思えてきたということである。

2日目はひとグループ報告者3名という、まさにラウンドテーブル三昧の一日だった。ラウンドテーブルは、様々なジャンルの方がキャリアの長さや年齢や立場に関係なく、対等な関係の中で話し合える場である。報告者の実践の中には必ずどこか共有しあえる部分がある。そこから人としての新しい仲間意識というつながりが芽生え、それらをそれぞれの言葉で語り合い、じっくり聞き合うことで同時に自分自身の実践の振り返りに基づく共有・共感から、新たな糸口の発見や新しい可能性の提案という進化が起きる。それがラウンドテーブルの面白さでもある。

ラウンドテーブルで自分のフィールドになかった分野の取り組みを聞くと、自分の関心事の中に、私のグループでいえば、私の中に商業高校という現場、美術という科目の意義、公民館主事の仕事という世界が新たに加わる。それは、新しい観点のアンテナが張られたということであり、今後の実践の方向性やつながり方の幅が広がったということになる。ラウンドテーブルの参加者がそれぞれ現場に戻った時、ラウンドテーブルで培われたつなぎ合いの基礎力はその後の実践の糧となるという確信が、ラウンドテーブルは「学び合いを支える場」であると感じた所以である。



zone D / 武蔵野美術大学芸術文化科学 教授 米徳 信一

今回、このような実践と省察の場に参加させていただき、<教育の今>を体感することが出来たのは幸い

でした。美術大学に勤める身としては小中高の教育について知るべきことはたくさんあると考えていたから

です。また、私が本学教職課程の三澤氏が推し進める『旅するムサビ』に参加し、ビデオドキュメンタリーを撮り続けるのは、教育全体における美術の役割を探るためでもあります。さて、ZONE D session IIIでは「私たちが子どもだったら」という視点から、ムサビと福井大学の学生が持参した美術作品を、参加者と鑑賞するワークショップが行なわれました。参加者は大半が県内・県外のあらゆる教科（図工・美術だけではない）の先生方で構成されていました。これがとても素晴らしい場を生んだと考えます。まず、三澤氏の『旅するムサビ』活動報告と問題提起を受けて、自分にとってのキーワード探しを3人の小グループで行なわれ、それは黒板に書くことによって作者不明の作品として全員に共有されました。次に6～7人のグループに分かれて対話型鑑賞を行なうのですが、特筆すべきは、全体の議論を所々でユーモアをまじえながら深めていく仕掛けであり、それを生成させたワークショップデザイナーの富永良史氏の存在です。ご自身は無縁であるとのことでしたが、そうであるがゆえに絶妙なバランス感覚で、このラウンドテーブルが語るべきテーマを鮮明に印象づけたと思います。

普段の『旅するムサビ』では学生達がファシリテーションを行なうだけですが、そのグループ毎の個別体験を別の次元からファシリテーションし関連づける構造は、学生にとっても大きな刺激になったと思います。美術という教科に限定するのではなく、美術を体験し互いに語りあうことで浮き彫りになってくる教育全体への示唆がそこにはありました。そして富永氏のファシリテーションは、美術によって「自分の中で起きた変化」への自覚を促し、「授業はだれがつくるのか？」という疑問を投げかけます。教室という場所とそこに集った生徒との相互作用の中で生まれる新鮮な何か。おそらくZONE Dに居合わせ、対話に参画した人々の中には教科を越えたイメージが生成されたのではないのでしょうか。ただし、そのイメージは瞬間的です。「開いた扉はすぐに閉まります」と富永氏は結びました。それが常に解放されていることを切に願います。最後に、このような場にお招きくださった福井大学の濱口由美先生に感謝いたします。

zone D / 武蔵野美術大学 学生 小暮 美帆

私達、旅するムサビは今回、出前授業をしに初めて福井へ訪問し、福井大学教職大学院で開かれたラウンドテーブルに初参加させて頂きました。

私達が参加した内容はZone D [教科] という枠で、Session I のポスター発表、Session II を受けてのSession IIIでの対話型鑑賞ワークショップと議論、そしてその次の日に行われたラウンドテーブルでの実践発表というてんこ盛りの内容でした。メンバーは皆、このような大きな教育のイベントに参加したことがなかったため、最初は緊張しており、前日も遅くまで準備や練習をしている学生もいましたが、無事に内容を終えることができ、終わった後は「おもしろかった」「楽しかった」という感想が自然とこぼれておりました。

それから、大学に戻り、再び皆で互いに感想を言い合う反省会を行ったのですが、特に、2日目のグループセッションにおける感想で、皆が口々に言っていた言葉がありました。

「わからないでしょ？現場にいないから」

「いつかわかるよ。勉強になったんじゃない？」

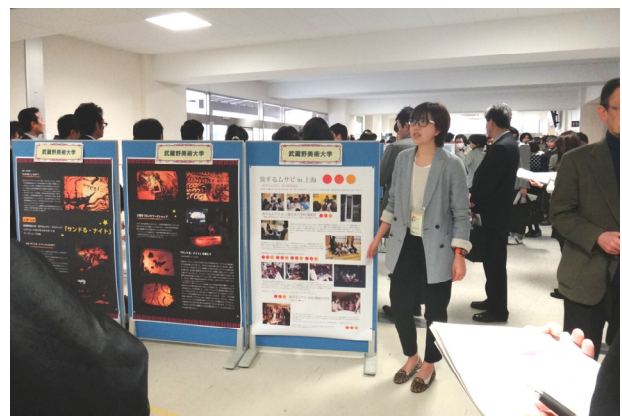
セッションの中で先生方と話をしていた、よくその言葉が出ていたと言います。

つまり、私達大学生はあくまで「部外者」として扱われており、現場にいる先生たちの中の問題に対して介入できる空気ではなかったのです。これが正直な感想でした。

私の参加したラウンドテーブルのグループには暴力と非行の多い学校の先生がいらっしやっただけですが、いつの間にか学級崩壊あるあるの時間となり、現場にいるからこそ共有できる先生方の会話に、私は介入することができませんでした。

私達も旅するムサビというプロジェクトで各地の学校へ出向き、鑑賞授業などを通して実践は積んでいますが、それはあくまで一時の経験で、学校側からしたらイベントのようなものです。その私達と同じテーブルについても、同等の立場で話すことなどできないというのは仕方のないことです。では私達があの場にいる意味とはなんだったのか。

むしろ、その意味こそが、現場の先生方から向けられた「部外者」という立ち位置だったのではないかと、後になって思いました。「部外者として扱われた



ときみんなどうやって討論に混ざったの？」と私が問うと「子ども側の意見として主張した」と答える人が大抵でした。

私達は教職履修をしている大学生なので、先生側の考え方もわかりますが、まだ高校生のような生徒側の感覚ももっている立場です。また、年功序列を気にせずなんでも言ってしまうのも学生という立場の長所で、反省会ではグループセッションに関して散々意見が出ました。

「論文読むだけで発表がおもしろくない、実践が伝わらない」「問題提起している割に反論させない空気だった」「発表だけで時間が終わって何も深められなかった。」「難しい言葉を使っていて逆にわかりづらい」反省会をしながら、「私達の立ち位置はこれだったのではないのか？これらの発言をあの場で言えていたらよかったのだ」と改めて感じました。

ラウンドテーブルは現場の先生方、教職大学院、教員を目指す学生など様々な立場の方と教育について学び、考える場だとお聞きしましたが、やはりそれは異

なる立場を最大限に活かしてこそおもしろい共有の場にできるのだと思います。異なる立場だからこそ見えてくることもあり、言えることもあります。そして、この関わり方のかたちも今後の教育をつくり、考えていくときに必要な連携のかたちなのではないかと思いました。

私は先生になりたいけれど、まだなれていませんし、生徒からは「先生側ではないお姉さん」として接して貰えます。けれど、私が先生になった途端、子ども達の態度は今までとところと変わってしまうのです。

無理に先生になりきろうとせずに、先生にはできないことを、大学生の立場を活かしてもっとやれることが私達にはあると思いました。

これからは、「教育に携わる部外者」として活躍することに精一杯取り組んでいきたいと思っています。

zone D / 武蔵野美術大学 学生 石川 彩香

私は、学部の1年生で経験も浅いため、多くの先輩方から知恵を頂くような気持ちでこのラウンドテーブルに参加しました。最終日のラウンドテーブルで、私は、全国各地に赴き、対話を用いた鑑賞授業などを行なう「旅するムサビプロジェクト」での実践報告発表をしました。その中で、ある先生がおっしゃった「君たちのやっている活動は素晴らしいけれど、子どもたちの感じ方や考え方を固定させないで欲しいな。」という言葉が今でも私を悩ませます。その言葉は、ZoneD授業で、私たちが実践を実際にさせていただいたときには出ることのなかった客観的な意見でした。その言葉を聞いて、私たちの活動は客観的な立場から見れば、そのような活動に映るのだということに初めて気付きました。

私は、苦手だ、わからないと敬遠されがちな美術を学んでいます。でも本当にそうなのかな？と私は思ってしまいます。私たちは普段から、感じたことや考えたことを「言葉」に置き換えて共有しながら生活をしています。でもその中に「言葉」には当てはめることのできない、よくわからない感情もあるはずです。それを一旦、絵や、なにか「もの」に置き換えて、共有できるものとしてから、みんなでその感情を、次は「言葉」にしながら一緒に考えてみる。すると、その作品を作った人も、その作品を見ている人も、もしかすると自分の思っていた以上に自分のことが解ってしまったりすることがあるのかもしれない。そういったことをふまえると国語で「言葉」を使って作文にすることも、美術で「絵」に置き換えることも本質的に

は同じだといえるのではないのでしょうか。私は、美術はSession IIで三澤教授がおっしゃっていたように、現実社会と非現実社会を結ぶメディアム（接着剤）のような役割を果たしているように思います。先に述べました、一旦「もの」に置き換える行為を通じて、自らが感じたことや考えたことを、友人たちとのコミュニティの中で、結びつける「もの」として美術は存在することができるのではないかと考えています。そのときの私は、うまく伝えることができませんでしたが、いま冷静になって考えてみるとそういうことなのだろうと思います。

このラウンドテーブルは発表したい・聴きたい、討論したいなど参加する目的は様々であったように感じますが、私自身としては、現役の先生方から知恵を頂き、自ら行なってきた活動や考えを見つめ直すことにより、また一つ成長できた、良い場でした。





ラウンドテーブルを振り返って

スクールリーダー養成コース2年／福井商業高等学校 福岡 利夫

1日目のZone Aでは「学校を変える：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」と、テーマに学校を変える学校改革が置かれていることに驚いた。これまでの本校での実践や実態と重ね、新たな気づきを与えてくれることを期待していた。本校は5学科8クラスの大規模校で、これまで就職・進学とも一定の進路実績を残してきた。また、部活動が盛んなこともあり学校行事への取組も意欲的で、生徒も学校生活に大変満足している。そのためか、学校生活の基本となる授業に関しては、これまで問題視されることがあまりなかった。しかし、生徒は授業に対して価値を見いだしているのだろうか、商業資格の取得や評定を高めることにやっきになっていないだろうか私自身疑問を抱いていた。授業を変え学校を変えていくとぐちを少しでもつかみたいと思った。

ポスターセッションでは、宇都宮市立新田小学校での「共有」・「共通理解」と、教職員が学校を挙げて方向性を同じくする取組が印象に残っている。仮説を立て、育てたい能力・態度を共有し、「学ぶ」とは学習者における変容であり、気づく・獲得する・習熟するなどの言葉に集約されることを学びとしてとらえ共通を図ることから始めた。さらに指導案自体の形も一目で見られるように改正された。高等学校においても来年度より新学習指導要領が本格実施となる。全ての生徒に確かな学力を身につけさせ、きめの細かい学習指導の充実と生徒一人ひとりの学習内容の確実な定着を図るために、指導と評価が一体となった年間計画の作成・活用について考え、指導の改善につなげていく必要があると感じた。

Session IIIでは、岡山県立林野高等学校における協同学習の取組みに聞き入った。どのような力を、各ステップでどうつけていくのか、ステップごとに自己評価・教員評価等、達成目標（評価規準）を学習者と共有されていた。また、学びの可能性を広げるために集団づくりをしていこうという観点から、協同（グループ全員が高まることをめざす活動）学習を取り入れている。学習課題を介していかに子どもたちに関わらせていくことを大事にし、協同学習とICT機器の活用をキーワードに授業展開をしてきた。さらに、学校での協同性は地域もつないでいた。総合的な学習の時間は、身の回りから課題を発見し、どのように解決する

か地域の方と一緒に話をすすめ、一緒に解決策を探ろうとする活動を行っている。答えがすぐには見つからない地域の課題を介して地域とつながっている。「教員の共同性がなくして生徒の共同性はない。」生徒の学びの背景にある教師のつながりが何より大切であると子どもたちと若い教師を支えるリーダーの言葉は情熱的であった。

2日目は、春の暖かな日差しが注ぐ中、自己紹介が続いて3つの実践報告が行われた。自身のこれまでの実践の歩みを語りながら見つめ直したり、時には「どうしてだろう」と疑問に感じ、そのときの思いとは異なり、絶えず変化している自分がいた。また、美術大学で学び、授業を一からつくろうと奮闘している学生の方や公民館主事として住民をどう支えるか地域の方から学んでおられる方も同じように疑問を持たれていた。しかし、一つのテーブルにいろんなジャンルの方から意見をいただくと自然に心に落ちるのは不思議である。立場が違うからこそ通じ合えるものがそこには存在している気がした。ファシリテーターの方のうなずきや包み込むような優しい言葉がけも、グループの成長をより促進するように思えた。共通性を探るヒントと多様な価値観の重みを再認識させてくれた貴重な2日間であり、授業を変え学校を変えていくための手がかりを多くの方から学んだことに感謝しながら今後の実践につなげていきたい。



探求活動に必要な視点とは何なのか

教職専門性開発コース2年 西 洋平

これで4回目の参加となるラウンドテーブル。毎回のことながら、様々な立場の方々と語り合う中で全く違った視点からの指摘やアドバイス、疑問などが挙げられ、その語りの中から学ぶことは多い。特に今回は長期実践報告書でまとめていたことや、公教育で教科を学ぶ意義・教科の必然性をM2で協働研究したことで、様々な実践をより自分たちの実践や構築してきた理論と照らし合わせながら語り合うことができたように思う。この2日間ではいろいろと語り合ったが、本報告ではSessionⅢ ZoneA 岡山県立林野高等学校の報告「課題解決志向の学習者の育成『地域の課題を考える』総合的な学習の時間」で私が感じ考えたことを報告することにする。

林野高校の実践は、地域の課題をその地域の大人たちと協同して解決していこうという、プロジェクト活動であった。その中で、最初こそなかなかモチベーションを高めていけなかった子どもたちも、6月に行われた「地域の達人講座」で、地域の自治体や住民団体等の大人たちと直に触れ合ったことから、徐々に積極的に活動するようになり、最終的には地域の活性化を目指してイベントを開催するまでに至ったそうである。この実践報告を聞いてまず感じたのは、私がインターンシップで関わらせて頂いた福井大学附属中学校(以下、附中)の学年プロジェクト(以下、学P)に近い活動だなという事であった。ただ、大きく違う点が2点あった。1点は地域との連携をしている点である。附中は校区が無いので、地域との連携が取りにくい。その点、林野高校は地域の課題をもとに活動を展開しているため、活動がより発展的になっていく可能性を持っているだろう。もう1点は課題設定が与えられたものか子どもたち自身で考えたものかという点である。附中の学Pでは1年生の春に宿泊学習を設け、子どもたちが3年間探究していくテーマを話し合いの中で決めるということを行っている。3クラス約120人の

生徒が一堂に会しての議論は子どもたちを大きく成長させるとともに、探究していくテーマに対するモチベーションを強くさせる。だからこそ3年間ものロングスパンの探究活動ができるのであろう。一方、林野高校は教師側から地域の課題について考えていくことや自治体等と連携していくことが提示され、その枠の中で課題の解決策を模索するという活動である。この場合、課題は子どもたち自身が決めた枠のものではないため、最初からモチベーション高く活動に取り組んでいくことは難しくなる。ただし、1年間の探究活動であることや地域との連携を継続させるといった意味では、これも一つの在り方なのであろう。

質の高い探究活動を行っていくことも大切ではあるが、もう一つ「持続可能」な探究活動にしていくことも大切な視点であろう。しかしそれは、昨年度までの踏襲として伝統的に持続させていくだけではなく、よりよい「発展の可能性」があるものでなくてはならない。昨年は〇〇だったから…という前例に捉われない活動を子どもたち自身がつくり上げていくような活動が、探究活動をつくり上げていく上では大切になるのであろう。とはいうものの、こういった視点からの授業づくりはまだできていない。春からは現場に出ることとなるが、この視点も入れつつ、子どもたちに合わせた授業づくりをしていきたいと思う。



スクールリーダー養成コース1年/高浜町立和田小学校 山本 毅

自身3回目となるラウンドテーブル。今回は、「学び合う授業の創造とそれを支える教師集団の協働について学ぶ」という自分なりのテーマを持って参加した。このラウンドテーブルの場には批評・批判はない。指導もない。あるのは参加者一人一人の実践をもとにした省察的な語りと、自分が対峙する子ども(人)のよりよい成長を願って自分自身が成長していこうとする前向きな姿勢である。特に、グループでの語り合いでは温かな空気が参加者を包み込み、面識のなかった者同士にいつし

か仲間意識を芽生えさせてくれる。そのようなラウンドテーブルのすばらしさを、今回も改めて実感することができた。

1日目のセッションⅠでは拠点校を含めた4校のポスター報告を聴かせていただいた。その内の新田小学校(宇都宮市)と中藤小学校(福井市)の2校については、セッションⅢのクロス・フォーラムにおいてさらに詳しい取り組み内容について説明いただく機会が持てた。ともに挑戦的な学校改革・授業改革の実践であり、語られ

る先生のエネルギーな姿勢には大いに学ばされた。新田小学校の「学び合う集団づくり」の研究については、本校が目指す「学び合う授業の創造」と方向性が全く同じで、その具体的な取り組みと教師集団の協働体制づくりはたいへん参考になった。一方、中藤小学校では来年度からの新校舎移転を見据え、積極的な取り組みが行われている。異学年・異学級交流、学年担任制（高学年における教科担任制）など既存概念を打破し、建築を生かした独自の学校文化を築いていこうとする取り組みに関心を寄せるとともに、よりよい学校づくりのためのコミュニティ育成に努める気概を感じた。

2日目のセッションIVでは、5名の固定メンバーで3つの実践報告を聴き合い、自らの実践を重ねながら一日語り合った。実践報告の一つは、三国高等学校で取り組まれている教師集団の協働体制づくりに関わる内容であった。個々の教員の専門的な力量に委ねられてきた「個人商店の建ち並び」ともいえる高等学校。しかし、学校を取り巻く社会状況の変化とともに、高等学校にも様々な課題が突きつけられるようになった。特に生徒指導面においては、教師が互いに協力して課題解決に向かっていかなければならない。しかし現場には教師集団が一同に会して話し合う場が実際にはない。そこで、ミドルステップアップ研修を受講された報告者の先生は、全教員の共通理解を図るため積極的に新たな提案を発信されてきた。現実問題として様々な壁がありながらも、「三国高校の生徒をこんなふう育ててきたい!」という願いを持って、学校改革のために突き進んでいってほしいという姿勢にたいへん感銘を受けた。

もう一つの実践報告では、豊科東小学校（長野県安曇野市）の6年総合学習の取り組みが紹介された。「米粉パンを作りたい!」という子どもの発意から展開されて

いく一年間の総合学習の歩み。それは、伊那小学校で3年間勤務された報告者の先生が「他の小学校でも伊那小学校のような総合学習を!」という願いを持って取り組まれた挑戦であった。荒れ地からの田んぼ作り、畝からの育苗、そしてアイガモ農法。子どもたちの自己決定の下に進められていく総合学習の中には一人一人の確かな育ちがあった。最後は「アイガモの最期」について皆で考え、悩んだ末に「カモ鍋として食べる」ことを決断した6年学級。まさに「命」について深く考え、「生きること」の見つめ直しにつながっていったこの総合学習の実践に、昨夏の夏季集中講座で読み解いた著書「共に学び共に生きる」（①伊那小教育の軌跡・②伊那小教師の物語）が重ね合わさり、目の前のまことの実践に大きく心を揺さぶられ、感動せずにはいられなかった。

今回は、自分自身も教職大学院での1年間の学びを生かした実践を、拙いものではあったが短時間で報告させていただいた。「学び合う授業の創造」を目指して教師集団が協働して取り組む授業研究会や実践報告会、協働を生かして自身の授業改善に取り組んだ実践をお聞きいただき、メンバーから意見をいただくと共に自分の取り組みの捉え直しをすることができた。その中には、今回のクロス・セッションでの貴重な出会いとの学びがあったことは言うまでもない。三国高等学校の竹澤先生から学んだ「教師集団の協働体制づくり」、豊科東小学校の馬淵先生から学んだ「子どもと教師が共に学び共に生きる総合教育」。1日目の新座高等学校・堀川小学校・新田小学校・中藤小学校の実践と報告者の先生方との出会いも含めて、自分に大きなエネルギーを注入していただいた。今回のラウンドテーブルでの出会いから得た学びをもとに、また新たな実践に挑戦していきたいと思う。

スクールリーダー養成コース1年／鯖江市鳥羽小学校 中道 優子

今回で2回目のラウンドテーブル参加となった。前回の夏のラウンドでは、異業種の方たちから直接自分の知らない新鮮なお話を聞いたこと、様々な立場や考えの人同士が気軽に交流し意見を言い合える雰囲気を感じたことから、今回はまた新しい視点や考えを得られるのではというわくわくした思いで参加した。

シンポジウムZoneA<学校>では、埼玉県立新座高等学校の金子先生の発表をお聞きした。学校を変えていくためのプロセスが、金子先生自身の取り組みを通して語られており、とてもパワフルな発表であった。その中で、「個に応じた支援」や「かかわりの中で個を育てる」という、特別支援的な視点を導入して生徒を育てていくという考えは、私自身の経験と重なりとても共感ももてた。「教師が遂げてきた発達だけを基準にして、一律に生徒を指導してしまっはいけない」という金子先生の言葉には、何かはっとさせられた。金子先生の発表は、日々の実践に対する自分の姿勢を振り返る場を与えてくれたとも感じる。

富山市立堀川小学校の石田先生の発表では、教師に問われることとして、「常に子どもをとらえる視点を見直す自己研鑽」「謙虚に自らの姿を見つめ、自ら更新していく営み」という、教師の専門性につながるキーワードをいただいた。見直したり、更新したりしていくためには、日々の実践や自分の姿をその都度振り返る(Reflection In action)態度をもたなければいけない。自分に対する謙虚や誠実さが、教師の専門性の重要な一つの要素なのだろうと考えさせられた。

また、お二人の先生から教師の同僚性を育むために「子どもを仲立ちにして教師をつなぐこと」「本音で語り合う場を設けること」というお話をいただいた。そのために、公開授業をすること、子どもの学びや良さを語り合える場を設けることという具体的な方策のヒントもいただいた。子どもの学びや成長を支えるために子どものことをとことん語り合う場こそが、教師の協働を支える基本であると実感した。

教職専門性開発コース1年 堀江 沙也香

2日間にわたるラウンドテーブルが終了しました。3月のラウンドテーブルは、1年間の集大成のように感じていましたが、私にとって、再び学び続けることを強く意識させられるきっかけになりました。あらゆる場所で実践される発表者の方の報告を聞き、自分の実践にたくさんの展望を抱くことができました。3月のラウンドテーブルは、私にとって集大成ではなく、これから1年間に向けた再スタートになったと思いました。

教職大学院に進学し、こんなにも早く過ぎた1年間があったらどうかと日々の実践を振り返らずにはいられません。今振り返れば、準備期間も含め、あんなに長く感じた研究授業も、終わってしまえば、もっと丁寧に取り組んでいればよかったと後悔してばかりいます。そんな実践さえも、再度振り返ってみると、当時は気がつかなかった子どもの姿や必要であったであろう支援について考えることができました。1つの事象を何度も検討し直すことで、その事象に新しいストーリーを作ることができました。実践だけではなく、日々の省察と長期的な視点を持った振り返りが必要だと言われ続けてきたことがやっと分かったような気がしました。今回のラウンドテーブルでは、そんな1年間の私の歩みを発表させていただきました。そこで、同じテーブルの先生方が私の実践について質問や感想をくださって、私に再度考える種を与えてくれました。福井大学で行われるラウンドテーブルでは、毎回たくさんの考える種をいただいていると思います。普段の生活の中では、決して交わることはないであろう人と出会い、お互いの実践を聴きあい、半日を共に過ごします。とても刺激的で新鮮で、時に癒しさも感

じる時間です。今回のラウンドテーブルは、特にこれからの自身の展望に大きく関係する話し合いをさせていただけたと思い、素敵なテーブルに参加できてとても嬉しかったです。

3月のラウンドテーブルでいただいた新しい種によって、私の学びはより豊かなものになり、今まで悶々と考え続け埋もれかけていた種が芽吹くきっかけとなりました。私の専門は特別支援教育です。日々、知的障害のある子どもたちと共に、生き生きと笑顔の絶えない学校生活を送らせていただいています。そんな子どもたちと過ごしなが、人が生涯に渡って自分らしく生きるために、教育的な立場でかかわるときに何をすればよいのだろうと考えています。私は、インターン実習生という立場から、比較的自由にかかわらせていただいております。そんな私の立場から行ってきた実践についてお話しさせていただきました。大通高校の平野先生のおっしゃった言葉がとても印象的でした。「私たちが日々接する子どもたちが、社会に出ていくとは、どういうことか。とりあえず、食べていけるだけのお金を稼げる子にすることです。」先生の言葉を聞き、来年度の課題別実習の方向性を考えました。私は、毎日目の前で楽しく過ごす子どもたちが、社会に出てからも笑顔で過ごしてほしいと思っていました。そのためには、今日の前の子どもたちにどのような力を育てていくとよいのかという視点を考えることはありませんでした。学校での教育の在り方を考えることは、大きく社会の在り方を考えることにつながるのではないかと思います。しかし、これはまだまだ私の中では考える種のままです。これからの1年間を通して、社会に参加していく子どもたちが必要となる育ちについて、学んでいこうと思いました。

上海師範大学・訪問視察を終えて



視察訪問団長／福井大学教職大学院 森 透

去る3月13日（水）から17日（日）までの5日間、中国・上海市の上海師範大学に、教員5名、院生7名の計12名で訪問視察を行った。もともと2007年に福井大学教育地域科学部と上海師範大学教育学院は協定書を交わし、同年5月8日に「交流事業に関する申し合わせ」をとり決めている（黒木哲徳教育地域科学部長と項家祥教育学院長）。今回の訪問視察は平成24年度留学生交流支援制度プログラムに採択されて実施したものである。

1. 日程

2013年3月13日（水）～17日（日）

2. 参加者

教職大学院教員 【5名】

引率教員2名（川上純朗・津田由起枝）／ベンチマーキング教員3名（森透・松田通彦・隼瀬悠里）
*但し、津田・隼瀬の2名は3日間（3月13日～15日）のみ参加。

教職大学院生・教職専門性開発コース2年生 【7名】

男性3名（河野紘典・小島俊祐・西洋平）／女性4名（角田望・辻本友舞・永田恭子・前田恵子）
*但し、角田（すみだ）は3日間（3月13日～15日）のみ参加。

3. 日 程 (○数字・下線は研究会及び交流会)

■ 3月13日 (水)

- 8時49分 福井駅発 (サンダーバード10号)
- 10時35分 新大阪駅着
- 10時45分 新大阪駅発 (はるか19号)
- 11時34分 関西空港着
- 13時40分 関西空港発 (MU516 中国東方航空)
所要時間2時間15分 (時差1時間)
- 14時55分 上海浦東国際空港着 (通訳・劉氏及び
国際交流所留学生係ヨウ氏出迎え)
大学バスで上海師範大学へ
- 16時頃 上海師範大学着, ゲストハウスへ
- 16時過ぎ ゲストハウス・ロビーにて
白益民国際交流処長と挨拶



① 16時30分～17時30分

教育学院長 陳永明教授と顔合わせ・簡単な紹介 (夏国際交流処副処長の司会進行)

- 18時～20時 夕食・意見交換会 (陳氏及び夏氏とゲストハウスの食堂にて)



■ 3月14日 (木)

② 9時～9時50分

教育学院長 陳永明教授との懇談
(教育学院の取組みについて)

10時～11時30分

構内・教師教育基地の訪問
ルーさん (主任) の解説

12時～13時30分

学生食堂で昼食

15時頃

ロビーにて叢副学長と挨拶

③ 15時頃～16時30分

教育学院院生2名 (女性) との懇談
(宗さんと王さん)

16時45分～17時30分

構内・数理学院訪問
学院長 張教授と面談・施設訪問

④ 17時45分～20時

上海市教育委員会国際交流処
張さんと夕食・意見交換会
(叢副校長及び夏氏も同席)

■ 3月15日 (金)

※9時25分 上海空港発 津田・隼瀬両教員と角田院生の計3名は帰国

⑤ 9時30分～11時30分

教育学院にて陳永明氏と研究協議 (教育学院と福井大学
教職大学院のプレゼンをお互いに行い、かなり突っ込
んだ議論が交わされる。)*お互いのパワーポイントの
データの交換も行う。

- 12時～13時 昼食 (ゲストハウスの食堂)

- 13時 大学公用車で上海市郊外の上海師範大学附属第四中学へ
向かう (約1時間)

- 14時 附属第四中学到着・校長と教頭の出迎え
ゲストルームで挨拶

⑥ 14時10分～50分

授業参観 (1コマ40分。小学6年「手工」, 小6と
中1の「体育」, 高校1年の「社会」「数学」)

⑦ 15時～16時頃

ゲストルームにて校長・教頭・教務主任と懇談
かなり深い議論ができる。

⑧ 16時～

隣の上海師範大学視察 (学部1年～3年生在籍)
日本語学科の女子学生2人 (2年生) が案内
正門前で記念撮影

- 16時30分 大学出発 (高速道路が渋滞)

- 18時頃 上海市内の繁華街・上海タワーに到着

- 19時過ぎ 学生2名も招待して中華飯店で夕食・意見交換会

- 21時30分頃 地下鉄でゲストハウスへ

- 23時過ぎ ゲストハウス到着



■3月16日(土)

12時～13時 ゲストハウスにて劉さんも交えての昼食・意見交換会

⑨15時～15時20分 陸書記と森との挨拶(通訳の劉さんと夏国際交流処副処長同席)

17時頃 森と劉さんが一行に合流・南京東路にて夕食・意見交換会

21時30分頃 ゲストハウスに到着

■3月17日(日)

6時30分 ゲストハウス出発—上海空港着(大学バス送迎)

9時25分 上海浦東国際空港発(MU557 中国東方航空)・所要時間2時間15分(時差1時間)

12時30分 小松空港着

14時 小松空港発—福井駅着(解散)

4. 研究上の交流

① 陳永明教授との交流(3月13日夕方, 14日朝, 15日午前中(2時間程度)の3回)→上海師範大学教育学院の現状と課題。大学全体での位置付けと現場と学校との関係についてお聞きする。14日は著書4冊を拝受。

15日は上海師範大学と福井大学教職大学院のパワーポイントによるプレゼンを行う。学校現場と大学との関係, 理論と実践との関係について議論する。



② 附属第四中学校訪問視察

校長から第四中学校の現状について説明。生活困難な地域の生徒たちが入学。進学校ではない。

生徒約500名, 教師約50名。3つの授業を参観した感想と質問。講義型の授業だけではなく, グループ学習やワークショップ型の探究的な授業について, 又大学との協働関係について質問したが, 大学との関係はあまり密接ではないとのこと。

③ 院生・学生との交流・懇談

3月14日(1時間程度)→修士課程2年生・宋さん, 1年生・王さん 2人とも教師を目指していないが, 将来をどのように考えているのか, 等について懇談。

3月15日→上海師範大学の2年生2人と交流。将来何を職業にするかはまだ分からない。

今年10月より来年8月まで福井大学に留学予定。

④上海市教育委員会との交流

3月14日→会食・懇談をしながら意見交換。市の教育委員会は大学との関係よりも国との関係が深い。

上海師範大学の教師教育改革に学ぶ

—国際観光都市・上海の現状から見えてくるもの—

福井大学教職大学院 松田 通彦



平成24年度留学生交流支援制度プログラムを活用し, アジア地域における大学と現職教員との協働研究を目的に, 上海師範大学を訪問視察するという貴重な機会をいただいた。主に同大学教育学院関係者との教師教育に係る研究協議ならびに附属中学校での授業参観・意見交換等が中心であったが, 日程・内容の詳述は森団長に譲るとして, ベンチマーカ一の一人としての視点も含めて私なりのアングルで, 率直な感想を3

点書き留め報告責任を果たさせていただきたい。

まずは、21世紀の巨大国家中国および国際都市上海のスケールの大きさ、そしてそこに居住する人々の躍動感溢るる日常生活に触れ、想像以上に驚愕の念を抱いたというのが第一印象である。上海浦東国際空港から上海師範大学に向かう片側4車線のハイウェイから視る広大な土地と林立するマンション群、さらにその横で進行中の新たなビル建設の槌音。ニューヨーク・ケネディ空港からマンハッタン摩天楼へ向かう高速バスの車窓からの風景と類似してはいるものの、押し寄せてくる熱いエネルギーは比較にならない。更に、ダウンタウン外灘での中山東一路に並ぶ租界時代のアールデコ調西洋建築物、東方明珠塔や上海環球金融中心の超高層ビル群を眺望して、改めて中国上海の経済成長、果てしない発展可能性に恐怖感すら覚えた。

上海師範大学で懇談・対談した叢副学長はじめ、白国際交流処長、夏国際交流副処長、陳教育学院長、張



数理学院長、さらには上海市教育委員会の張氏に至る多くの関係者は、博士号を有する高学歴者であるばかりか、いずれもが雄弁で冷静沉着、自らの職務に自信とプライドを有する様が手に取るように伝わってきた。また、構内の学生たちの一挙一動に目を転じると、幼く見える容姿からは想像できない貪欲な向上心、刻苦勉励の日常が垣間見えるような気がした。そういえば、大学の附属学校なのであろうか、街中で散見された校門での親の出迎え風景は、単に交通や治安面での安全確保のみならず、一人っ子政策のもと我が子に期待するせめてもの親心の成せる技なのではと独り合点してしまった。

一方、ブロックを一つ隔てて犇めく平屋の民家には、所狭しと洗濯物が並び玄関前には自転車類が無造作に放置されていた。大学近隣のスーパーや店屋は清潔感に乏しいながらも活気があり、恰も昭和30年代日本の市井を髣髴させるようである。しかしながら、大学食堂裏手にある従業員宿舍の雑居部屋、垂れ流しの便所を見るにつけ、ある大学関係者がいみじくも呟いた「中国は何かにつけギャップが大きい。」とのコメントが、さもありなんと印象を強くしたというの

が報告の1点目である。

2点目は、上海師範大学における教師教育改革についてである。立役者の一人は同大学教育学院長である陳永明教授であるが、氏の基本理念は、予め輪読してあった「東アジアにおける学校教育改革の共通性と差異の比較に関する総合的調査研究」（2008年3月、戸北凱惟上越教育大学副学長）から承知してはいたものの、直接、御本人から話が聞けたことは意義深いことであった。が、同時にまた、理念の背後に横たわる重い課題を認識できたのは存外の成果であった。

2007年、陳教授のイニシアティブのもと、上海師範大学が中国で初の3+3の新しい教師教育モデルを開発したことは周知のとおりであるが、その目標は、基礎教育を重視し、時代のニーズに応じた研究成果を実践と繋げ、専門性および教養性を備えた優秀な教師を育成するというものである。本学教職大学院のキーコンセプトと相通じるものが多く、興味深く氏のプレゼンを拝聴したが、同大学の6つの学院および12の学科から厳選された優秀な25名の大学生による教師教育創新クラスにおいてエリート教師養成を目指す試みは評価できるものの、具体的な授業づくりに関する構想や、理論と実践との繋がりがやや不透明だったのは残念であった。

因みに、最終日に訪れた大学附属第4中学校の授業風景は、教師から生徒へのいわば一方通行による典型的な教師主導型知識伝授教育であり、教員の熱心な指導には敬意を払いたい斬新なアイデアや工夫は発見できなかった。同校長からも、大学関係者が授業指導で来校することはないとのことであった。それ故か、学校拠点方式による本学の教職大学院の取組みには大いに関心を示されたのがせめてもの救いであった。これらを総括すれば、同大学教育学院の課題は、まずは、理論と実践との架橋を構築することが先決であり、同時にそれはまた、大学全体での価値共有、学校現場からの信頼確保を必要不可欠とする教師教育改革の課題でもあろうと考える。もちろんこのことは、部分的ではあるが本学教職大学院に通じる永遠のテーマでもあり、互いに伯仲した議論が展開できたのは、訪問期間中最も至福に浸れる時間であった。



3点目は、コミュニケーションの手段としての外国語能力の必要性についてである。上海滞在中、常に同行いただいた劉氏には言葉に尽くせぬほどお世話になり、氏の存在なくして今回のベンチマーキングはほとんど機能しなかったといっても過言ではない。福井大学での留学時代が長期にわたっていたらしいが、日本語能力の高さには舌を巻いた。それどころか、きめ細やかな気配り、丁寧すぎるほどの対応、一流の通訳ガイドでもなかなかこの域には達しまい。20数年前、共に仕事をした中国浙江省外事弁公室の能吏にも劣らぬ活躍ぶりに深く感謝の意を表したい。

それにつけても、今回の訪問中、懇談した大学関係者は、ほぼ例外なく流暢に日本語や英語を駆使するのには殊の外驚いた。実績のある研究者や重要ポストに就く行政管理者にとって、意思疎通の手段として国際的に通用する外国語を習得することは当然ということなのであるが、翻って福井大学のみならず、日本の大学関係者はどうであろうか。謙虚に反省すべき点が多々あるはずである。彼等の語学習得は留学経験に抛

るものでもあるが、学校教育の影響も無視できない。上海では英語教育は小学校から必修となっており、小学3年生でも流暢に英語を使用するには衝撃を受けた。私自身、平成24年度、「福井県英語教育推進委員会」の統括を依頼され、年度末には実効性の高い具体的施策が提言される運びになっているが、本学語学センターの運営・利活用もまたしかり、グローバル化が加速化する今、児童生徒や大学生に対する実践的語学教育が、いよいよ待ったなしの段階に至っていることも痛感させられた5日間であった。

以上、紙面の都合上、3点の御報告に留め置きたい。久々の海外出張であり心躍る一面もあったが、異文化圏での食生活の限界を思い知らされた日々でもあった。若いころ、一時期米国で生活し、その後も外国人との付き合いに不自由を感じたことはなかったが、やはり、日本に優る国は他にない。帰国後、福井で食した蕎麦屋Yでのおろし蕎麦の味はさすがに格別であった。

■お知らせ

ニュースレター50号19ページで掲載しておりました、平成25年度福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻年間計画（1次案）の福井大学教職大学院ラウンドテーブルの開催日に誤りがありました。ご迷惑をかけたこととお詫びし、次のように訂正いたします。福井大学教育地域科学部附属小学校第39回教育研究集会の開催日もお知らせいたします。どちらも、たくさんのご参加をお待ちしております。

① 福井大学教職大学院ラウンドテーブル

平成25年6月29日(土)・30日(日)

② 福井大学教育地域科学部附属小学校第39回教育研究集会

平成25年 12月6日(金)

Schedule

4/6 sat 開校式

4/20 sat - 4/21 sun 合同カンファレンス

5/18 sat 合同カンファレンス

5/25 sat

4/27 sat - 4/28sun 合同カンファレンス(予備日)

合同カンファレンス(予備日)

[編集後記]

今年の春は、教職大学院で共に学び合い励ましあってきた多くのスタッフたちが新天地へと向かうことになりました。ラウンドテーブルや上海師範大学視察などのレポートをスタッフ退任挨拶と重ねて読んでいきますと、そこから連鎖し想起される様々な活動も思い出のアルバムのように蘇ってきます。活動の場が異なっても、ニュースレターが互いの活動の振り返りと次への道しるべを見出す共有の拠点になることを願っています。(濱口由美)

教職大学院Newsletter No.51

2013.04.06発行

2013.04.06印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp

